

【告発スクープ】小6女子をいじめ自殺に追い込んだ「一人一台端末」の恐怖

パスワードは全員「123456789」

2021/09/13 17:00

子供たちに「一人一台端末」を配る国の「GIGAスクール構想」の被害者が出た。昨年、全国に先駆けて端末を配った東京都町田市のICT推進校で、小6の女の子がいじめを苦しんで自殺したのだ。配布端末のIDは出席番号、パスワードは全員「123456789」で、なりすまし被害が横行していた。当時の校長は、20年以上前からICTを学校教育に取り入れてきた先駆者で、GIGAスクール構想の旗振り役として知られる人物だった――。

学校で配られた端末でYouTube見放題

「あれ、和哉（仮名）、まだYouTube見ているの？」

昨年9月某日の夜11時。ベッドの上で寝転びながら、動画を見ている小学6年生（当時）の和哉さんを見て、母の小林愛菜さん（仮名）は驚いた。小林家では夜9時以降、クロームブックは使えない設定にしていた。「宿題をやっていた」と言い訳する和哉さんからクロームブックを取り上げて、YouTubeからログアウトしてみたら、家庭で使っているIDとは別のものが入っていた。

「005〇〇-〇〇〇」

それは、和哉さんの学校で配られたクロームブックのIDだった。

昨年の5月下旬、和哉さんが通う町田市立小学校では、休校中の学習に使えるようにと6年生に一人一台、クロームブックが配られた。

文科省が推進する「GIGAスクール構想」――学校のインターネット環境を整備し、生徒一人に一台ずつ端末を配って教育の情報化を進めていく――で、全国の自治体に「一人一台端末」が行き渡ったのは、今年3月末のこと。この学校での配布はこれより10カ月も早い。一学年だけとはいえ一人一台を配備できたのは、ICT教育推進に熱心なA校長（当時）の方針だった。

A校長は20年以上前から授業でICTを取り入れてきた先駆者で、現在のGIGAスクール構想につながる「学校教育の情報化に関する懇談会」（2010年～2013年、座長・安西祐一郎氏）に第一回から参加。ほかにも文科省の「教育の情報化に関する手引」作成委員（2009年）、「学びのイノベーション推進協議会」委員（2011～2014年）を務めるなど、日本のICT教育推進の旗振り役として知られている。

A校長をそばで見てきたPTA会長は次のように振り返る。

「A校長は、とにかく『一人一台端末』を強く求められてこられました。先生がいらっしやることでICT推進校に選ばれていた本校ではいち早く6年生に配れることになったんです。2019年11月には全国から500人くらい先生たちがくる大規模なICT教育の研究報告会が学校で行われて、文科省や経済産業省の方と座談会をされていました。その翌日に、『国で一人一台が決まった。一生懸命、訴えてきたからね』と大変喜ばれていたのを覚えています」

こうして配られた端末は、ゲームし放題、YouTube見放題の設定になっていた。制限がかかっていたのは一部の成人向けや暴力的なサイトだけで、利用時間などの制限はない。やがてこの端末が、家庭や学校に混乱を招き、最悪の事態を招くことになる。

「最初は気づいていませんでした。学校で配られたタブレットなら、当然、時間や検索に制限がかかっていると思っていたんです。ましてやICT教育の第一人者で知られるA校

長がいるので、信頼していた。でも、子供の様子がおかしかったので調べてみたら、なんでも検索できるし、ゲームもできてしまう。学校からはクロームブックを使った宿題が出ていて、やけに時間がかかっているなど思っていたのですが、9月の一件で遊んでいたんだとわかったんです」（小林さん）

家庭のコントロールが効かない端末

ほとんど制限がない形で渡されたクロームブック。学校側が“設定ミス”をして、このような仕様になっていたわけではない。

和哉くんの同級生のお母さん、木村聡子さん（仮名）は教えてくれた。

「A校長は、あえてルールを設けず、子供の自主性に任せて、失敗のなかで学ばせるという方針なんです。クロームブックを持ち帰らせる際も『長時間や深夜の使用はしないようにしてください』『勉強以外に使わせないようにしてください』と書いたお便りを渡すだけ（写真参照）。でも、これは家庭に押し付けているだけ。無責任だと思います」

A校長が先駆者として ICT 教育について取材を受けた記事がある。そのなかで A 校長は「ルールをつくらなかったことで自主運営できるようになった」と話しているが、木村さんは「これはウソ。実際にはめちゃくちゃな状態で、記事を読んだ時はどこの学校の話かと思いました」と断じる。

2人が何より迷惑だと語るのは、家庭で使っている端末も学校の ID・パスワードでログインすると、使い放題になってしまうことだ。

「わが家には学校で配られる前からクロームブックがあったのですが、それについては私のメールアドレスでアカウントを作成し、検索のフィルタリングをしたり、使用は1時間以内と制限をかけていました。しかし、子供は制限のかかった家庭のアカウントからログアウトし、使い放題の学校アカウントでログインして、ゲームをしてしまう。家庭でのルールが無意味になってしまうんです。学校が管理権限者なので、私たちは設定に触れることができません。家庭に管理を押し付けるなら、せめてコントロールできるようにして、って言いたいです」（小林さん）

【Chromebookの持ち帰りにおける留意事項について】

- ドリルソフト「やるKey」、G suiteを活用し家庭学習で使用します。
- 学校で出された課題について調べるなど、学習に関することでの使用は可能ですが、学習に関係のないことでのインターネットの使用はしないようにしてください。
(暴力や成人向け等のジャンルのサイトの閲覧は、制限がかかっています。)
- G suiteで共有している友達の作品や文書(書き込み)などを、勝手に使用(ダウンロード)しないでください。勝手に使用することは、著作権法違反になります。
- 人の写真や個人情報などは載せないようにしてください。
- 長時間の使用や深夜の使用はしないようにしてください。
- Chromebookは、登下校中に使用しないようにしてください。
- Chromebook、LTE通信機(ドングル)は水につけたり、暖房器具の近くに置いたり、磁石に近づけないでください。
- 故障、破損、紛失のないよう、十分に気を付けてください。万が一のときは、すぐに学校に連絡してください。

授業中もゲームし放題。ICT推進校の実情

子供たちが配られたクロームブックで遊んでいたのは、家庭内だけではなかった。

和哉くんと、その同級生である勇くん(仮名)、直之くん(仮名)は「授業中も自由に検索したり、ゲームしていた」口を揃える。

学校で人気だったのは、「slither.io」というヘビのゲームや「VENGE」というシューティングゲーム。VENGEはオンライン上で待ち合わせて一緒にプレイする子もいたという。

「友達とはハングアウトというチャットでやりとりできました。部屋(対戦するステージ名)を伝えれば、そこで待ち合わせできます」(勇くん)

先生に見つかって叱られないのかと聞くと、「厳しい先生だと没収されることもあるけど、優しい先生だと『やっちゃダメだよ』くらいにしか言われない」(直之くん)という。さらに、クロームブックは授業中に先生の目を盗んで遊びやすい機能もあるのだという。

「クロームブックは、Alt+Tabを押せばすぐに画面が切り替わるので、先生が通ったときだけ課題の画面にすればいい。みんな課題はさっさと終わらせて、残り時間は遊んでいました」(勇くん)

人のアカウントを使う「なりすまし」が横行

端末を“正しく”使った授業中でも、トラブルは多発していた。

「スプレッドシートを使って、授業の感想や気づいたことなど、みんなで書き込みをしますが、全部消されて15分くらい授業が止まってしまうことがよくありました」(勇くん)

これは操作ミスで、意図せず消してしまったケースもあったが、なかにはいたずらで消した子もいたという。被害を訴えるのは、勇くんの友達の蓮くん（仮名）だ。

「スプレッドシートが消えたときに、履歴をたどればだれがやったかわかるのですが、身に覚えがないのに僕がやったことになったんです。5回くらい続いて、違うっていても信用されませんでした。だけど、クロームブックから離れて友達と話していた時間に、俺が操作したようになっていたことがあって、それで別の人がやっているってわかってもらえたんです」

つまり、授業中に誰かが蓮くん“なりすまし”て、いたずらをしたのだ。

なぜ、こういうことができたかという、IDはクラスごとに前半が同じ数字で、末尾の3ケタが出席番号、そしてパスワードは、全員共通で「123456789」だったからだ。同じクラスの児童なら、出席番号がわかるので、簡単に蓮くんになりすますることができた。

「いろんな人が『なりすまし被害』にあっていて、書いていたものが消されたり、勝手に書き込まれたりしていました」（勇くん）

別の同級生の女の子も、「なりすましされるのがイヤすぎて、自分でパスワードを変えた子もいました。そうしたら先生に勝手に変えるなど怒られていました」と証言する。なぜ、同じパスワードにしたのか理由はわからないが、子供たちは意地悪したい相手や気になる相手のアカウントにログインして、作成中のスライドに“スタ連（スタンプを連打する）”したり、チャットに入って会話を覗いたり、とにかくやりたい放題の状態が続いた。

チャットで悪口を書かれた女子児童が自殺

A校長のいう「自主性に任せて、失敗の中で学ばせる」方針は、結局、取返しのつかない事態を招くことになる。

昨年11月30日の夜、当時6年生の山根詩織さん（仮名）が、自宅の部屋で首を吊って亡くなったのだ。部屋にあった遺書には「学校でいじめにあって自殺する」「A子とB子にいじめられていた」などとはっきりと書かれていた。

A子とB子がチャット上で「詩織、ウザイ」「まじで死んでほしい」とやりとりしていることは、“なりすまし”で覗くことで多くの同級生が知っていた。そして、詩織さん自身もクロームブック上でそれを目撃し、C子とD子に相談していたが、その後、C子とD子にもいじめられていた。これらは遺族が同級生からの証言を集ることでわかったことだ。

母親の弘美さん（仮名）は語る。

「わが家でスマホは与えていませんでした。パソコンもリビングに家族共有のデスクトップを一台置いていただけ。でも、クロームブックがわが家に来て、娘は部屋に引きこもるようになりました。クロームブックで悪口を書かれ、娘自身が自殺のことを調べていたこともわかっています。自殺の直接の原因はいじめですが、学校で配られたクロームブックがそれを助長し、娘を追い詰めた面もあるのではないのでしょうか？」

山根夫妻は11月30日のうちに、遺書を持ってA校長を訪ねて調査を依頼する。しかし、その後、学校の対応に不信感を募らせていくことになる――。

（続く。次回は、9月14日公開予定）

9月13日、山根詩織さん（仮名）の遺族と代理人弁護士は、文部科学省記者クラブで事件についての会見を開きました。遺族は「学校は端末上で起きたいじめを放置し、適切に対処しなかった。GIGAスクール構想で配られた端末がいじめの温床になっていて、全国に娘と同じように苦しんでいる子どもがいるのではないか。安全性を担保してほしい」と訴えました。この連載では遺族の了承のもと、これから事件の細部に迫っていきます。

「小6女子いじめ自殺」チャットに書かれた誹謗中傷はなぜ消されていたのか

校長「いじめは解決していた」

2021/09/14 13:00

昨年11月、全国に先駆けて「一人一台端末」を配った東京都町田市の小学校で、小6の女の子がいじめを苦に自殺した。遺族は女の子の遺書を持って学校に行き、調査を依頼。しかし、GIGAスクール構想の旗振り役として知られる校長は「いじめは解決していた」と繰り返すばかりだった。告発スクープ第2弾――。

「最初は学校を信じていました」

町田市の小学校に通う6年生の山根詩織さん（仮名）が、自室で亡くなっているのが発見されたのは、2020年11月30日（月）の0時半頃。兄の信哉さん（仮名）が0時を過ぎても部屋の明かりがついているのを不審に思って部屋をのぞいたところ、首をつって絶命していた。

部屋を探すと、鍵がかかった机の引き出しの中から日記形式で書かれた遺書が見つかった。そこには、「A子とB子にいじめられている」「こいつらのために自分は死ぬ」「もうラクになりたい」などと綴られていた。

いじめについて、両親はまったく気づいていなかったという。

「娘は学校を欠席したこともなかったし、友達の悪口を言うこともありませんでした。だから、亡くなった娘を見た時に、一体、何が起きているのか……理解できませんでした。遺書を見つけて、いじめを受けていたと書かれていたのですが、初めて知る内容ばかりで、混乱しました」（母・弘美さん／仮名）

翌朝、学校に電話で亡くなったことを伝え、夕方にはA校長を訪ねた。そこにはA校長と副校長、6年生の担任3名が待っていた。

「いじめのことが書き綴ってあるから、調べてくださいとお願いして、遺書のコピーを渡しました。私たちは何もわかっていなかったので、学校に助けを求める気持ちでした」（弘美さん）

そして、最初は子供たちに自殺したことは言わないでほしいと伝えたという。

「自殺したと聞いたら、子供たちがショックを受けて、本当のことを話してもらえなくなると懸念したんです。だから、まずは子供たちに死んだことは言わずに調べてくださいとお願いしました。あとからわれわれはこのときのことを後悔することになるのですが、学校を信じていたんです」（父・達彦さん／仮名）

心のアンケートでSOSを出していた

山根夫妻から調査を依頼されたA校長は、「ちょうど今、ふれあい週間で、これから人権週間が始まるので、それを理由にそれとなく子供に聴き取りを行います」と請け負い、結果は毎週金曜日の夕方5時半に報告することになった。

報告のなかで学校側から、9月10日に実施した「心のアンケート」で、詩織さんが「友達関係に悩みがある」と書いていたことを知らされた。

「学校は9月10日の心のアンケートのあと、詩織に話を聞いて、A子とB子にいじめられていることを聞いていました。詩織はA子とB子には言わないでほしいと言っていたそうですが、担任のB先生は二人に伝えてしまったのです。9月14日、放課後の委員会活動で3人が集まった時に、当事者だけで話し合いをしたそうです。その時、A子とB子は詩織に謝罪していじめは解決したとB先生に報告したと言うのですが、とんでもないと思いました。詩織は、遺書を9月23日から書き始めていたからです。当事者同士で話し合いをさせた結果、解決どころか、エスカレートしたのだと思いました」（弘美さん）

弘美さんは、詩織さんが書いた心のアンケートのコピーをもらいたいと頼むと、「情報管理の手続き上、渡せない」「ご自身で市役所に取り寄せに行ってください」という回答だった。このあたりから、学校だけに任せては本当のことはわからないかもしれないと思うようになったという。

「いやな予感」は11月30日の時点でありました。夫が担任のB先生に『山根詩織がいじめられているのを知っていましたよね?』と聞いたら、『はい、知っていました』と即答しました。すると、A校長が『いやいやいやいや、B先生、そういうことではないですよ?』と制止したんです。B先生が口をつぐんでしまったので、私は『人が一人亡くなっているの、きちんと調査してください』とお願いしましたが、このあとの聴き取り調査の報告で学校から上がってくるのは、『9月にいじめは解決した』という話だけでした」(弘美さん)

リーダー格の女子4人に振り回されていた

学校任せにできないと思った弘美さんは、12月5日から詩織さんが亡くなったことを伏せたまま、同級生への聴き取り調査を始めた。そこで、学校で配られたクロームブック上で「詩織、まじキモイ」「ウザイ」「死んでほしい」などと書かれていたことがわかった。

「詩織の友達から聞いたことを伝えて、そのことを学校でも調べてほしいと頼みました。すると、実際にA子本人が先生に『チャット(ハングアウト)で悪口を書き込んで、B子に送っていた』と認めました。それは二人だけのやりとりだけだったのですが、詩織のパソコンの調子が悪くて、その時は仲良くしていたB子の端末を借りて作業したときに、A子からB子に『まじキモイ』『ウザイ』『死ねばいいのに』などのメッセージが送られてきたのをたまたま見てしまったようです。戸惑った詩織が、友達のC子とD子に相談したことを、学校の聴き取り調査でC子とD子が話しています」(弘美さん)

保護者の話によると、A子・B子、C子・D子は、「6年生女子のスクールカーストの上位4人で、A子・B子コンビ、C子・D子コンビはライバル関係で何かと張り合っていた」という。詩織さんは誰とでも仲良くするタイプで、もとは4人と仲良しだった。

チャットで悪口を書かれたことをきっかけに、C子とD子と過ごすことが増えた詩織さんだったが、誘われればA子・B子とも遊んだり、帰ったりしていた。すると、C子・D子が「かばってやったのに、裏切り者」とクラスの同級生の前で絶交を宣言。どちらからも見放される形となり、同級生たちも4人の報復を恐れて、誰も表立っては詩織さんと仲良くできない状態に陥っていたという。

チャットの履歴がハッキングで消された?

12月中旬に、弘美さんはチャットの履歴を見せてほしいと学校に依頼する。

すると12月24日にA校長から電話がかかってきて「チャットで悪口が書かれていたのは事実でした。でも、私たちも不思議なんです、履歴が消えています。書き込んだと認めたA子さんも、『あれ、ない?』と戸惑っていました。誰が消したかわからない、ハッキングにあったかもしれません」と報告があった。

“ハッキング”というと大がかりな事件のようだが、この学校ではIDは出席番号、パスワードは123456789と全員が共通だった。だから、誰でもやろうと思えばA子のアカウントにログインして、チャットの内容を見ることも消すこともできた。

詩織さんの同級生の男の子はこう証言する。

「11月30日以降、詩織が学校にこなくなってから、なぜ学校に来ないのか、それはA子・B子、C子・D子がいじめていたからだみんなが噂するようになりました。そのとき、C子・D子の子分みたいな男子の孝(仮名)が、C子とD子のせいじゃないと証明するために、A子のアカウントにログインして、悪口を見つけて僕に見せてきました。そこには『死んでほしい』と書かれていて、ひどいなって思いました」

「加害者の後追い自殺が心配です」

山根さんの家には、12月になると詩織さんの同級生から「早く学校に来てね」という手紙が届いたり、「なぜ、学校を休んでいるの?」と問い合わせが来るようになった。

山根夫妻は「子供たちに嘘をつくことがつらい」と感じるようになり、A校長に対し「年明け早々には自殺を公表してほしい」と依頼した。

するとA校長は「とんでもない。加害者が後追い自殺する危険性があります。後追い自殺って本当にあるので、公表はできません」と断った。山根夫妻が何度頼んでも、「いまの段階では厳しい」と口止めされ、子供たちに嘘をつき続けるしかなかった。当時、子供たちの間では、「山根詩織は不登校になった」と受け止められていたという。

このあと、学校の隠蔽ともとれる対応は露骨になっていく――。

(続く。次回は9月15日公開予定)